

# 野ばらを産む苦しみ(其三)

## 作詩以前

吉 田 藤 吉

Leiden des Sängers von Röslein vor der Dichtung

TOKICHI YOSHIDA

然し、私が諸君を彼女の田舎家に案内する前に、彼女によつて感じさせられた、私の傾愛と満足とを強め又高めるに与つて力あつた或事状を述べることを私に許して戴き度い。

ゲーテの滞在まさに半歳に入らんとするシュトラスブルグに於いて、彼がヘルデルと初めて出会つた期日は、其後のゲーテの精神と行為との急速な展開に密接な関係を有ち始める時機ながら正確には知られていないようである。

例えば、ビールショウスキーは、其著「ゲーテ」に於いて、「ヘルデルは、1770年9月初めに、ホルシュタイン・オイティーン公子の御供として、シュトラスブルグに到着した。……彼のこの勤めは約三ヶ月前の6月中葉に始まつたばかりであつたが、公子の伝育官との折合もうまく行かず、又役目柄の窮屈な束縛もあつて、早くも嫌気がさしていた。それで到着後14日にして解約を申出たのであつた。然し、彼の尿管閉塞の手術が、彼に更にシュトラスブルグに滞在し続けることを余儀なくした。ゲーテは、この優れた到来者を訪ねた時は、この人に就いて殆んど聞き知つていたところもなかつた。」<sup>1)</sup>と述べているが、その初めての出会いの日に就いては明確にしてはいない。ハイネマンも其著「ゲーテ」に於いて、「1770年9月」<sup>2)</sup>とのみ語つているに過ぎない。ウォルフも亦、其著「若きゲーテ」に於いて、「1770年9月ヘルデルはシュトラスブルグに到着したが、ゲーテはこの情操的世界の告知者と速かに親交を結んだ。」<sup>3)</sup>と告げているのみである。故茅野蕭々教授は其著「ゲエヨテ研究」に於いて、「それから9月初めにシュトラスブルグに来た。」<sup>4)</sup>と伝え、又故木村謙治教授は其著「若きゲーテ」に於いて「ヘルデルがシュトラスブルグに来たのは1770年9月4日のことである。」<sup>5)</sup>と伝えているが、両教授共に、ゲーテとヘルデルとの初めての出会いの日に就いては、矢張り触れてはいない。然るに、フランツ・コッホの独乙文学史<sup>6)</sup>に材料を得るところ甚だ多いとした鼓常良教授の独乙文学小史には「1770年の9月下旬にシュトラスブルグ大学の学生であつたゲーテが、ツーム・ガイストと云う旅館にヘルデルを訪ねた。」<sup>7)</sup>と伝えられている。

以上の諸家の種々な説から推察すれば、ゲーテがヘルデルと旅館ツーム・ガイストに於いて初めて出会つたのは、ヘルデルがオイティーン公子の御供の役の解約を申出た後のことであつたように受取られる。蓋し、ヘルデルがオイティーン公子の御供をしてシュトラスブルグに到着したのが、木村教授によれば、9月4日のことであり、而て御供の役の解約を申出たのが、ビールショウスキーによれば、其14日後の18日頃であつたからである。これは恰も、ハイムが其大著「ヘルデル」に

\* Goethe: aus meinem Leben zweitel Teil, zehntes Buch.

1) Bielschowsky, Albert: Goethe, neugearbeitet van Warther Linden, erster Bd. Seite 114-115.

2) Heinemann, Karl: Goethe, vierte, verbesserte Auflage, erster Bd. 1916, Seite 89.

3) Wolf, Eugen: Der junge, Goethe, dritte Periode, Anfang April 1770 bis Ede August 1771.

4) 茅野蕭々: ゲエヨテ研究, 154頁.

5) 木村謙治: 若きゲーテ研究, 135頁.

6) Koch, Franz: Geschichte deutscher Dichtung.

7) 鼓常良: 独乙文学小史, 53頁.

於いて「ヘルデルは20日の晩に目に涙して公子に別れを告げた。」<sup>8)</sup>と語っていることや、更に、ゲーテとヘルデルとの初めての出会いの時期を、敎授と同様に「それは、我々の承知するところでは、9月の末であつた。」<sup>9)</sup>と述べているところに添うてもいる。殊に9月25日と27日にゲーテは法学の前期試験を受け、それによつて其後の法学の受講の必要から解かれた、<sup>10)</sup>とカルル・ペトリーが云つていることから推察しても、ゲーテが旅館ツーム・ガイストに於いてヘルデルと初めて出会つたのは、遅くとも、彼の法学の前期試験の終つた日、即ち27日から以後の9月下旬も押迫つた或日であつたのではあるまいか。

然しながら晩年のゲーテの追憶のまゝの、或は修飾もあるらしい自叙伝ではあるが、その語るところによれば、以上の推察を許さないようなものがある。例えば、ヘルデルがオイティーン公子と別れて自分の寓居に引移つたのは、明かにゲーテとの出会いの後のことのように述べられているのである<sup>11)</sup>。つまり二人の初めての出会いは、もつと以前のように、然し実に、劇的に述べられているのである。

ゲーテとヘルデルとの初めての出会いの時機をばかしくも吟味することを必要とする由因は、実は其3ヶ月程以前の下エルザス及び北ロートリンゲンの騎行からの帰路「憬慕する女性の近くを横切りつゝも」<sup>12)</sup> 実際には彼女を訪れるには未だ心熱さずに居つたゲーテが、今や図らずもヘルデルに出会い、彼の思想に直接触れて開眼し、且つヘルデルによつて譏聞かせられる敬虔な「ウエークフィールドの田舎牧師」の田園詩的な物語に、更めて連想する「ゼーゼンハイムの牧師」の家と彼の増々憬慕する女性フリーデリケをば、今や間もない10月中葉に訪れるためには、彼の精神の、それに相応しい展開に必要な時が考慮せられなければならないからである。そうとすれば、其時間が、ヘルデルと初めて出会つた日を9月末日では、少な過ぎる感がある。然し、啓示や開眼は瞬間のことも亦あり得る。

心の貧しきものは幸なり。

扱て1770年9月末の、シュトラスブルグに於るゲーテとヘルデルとの出会いは、やがてゲーテに「重大な影響をもたらすことゝなつた特筆すべき出来事であつた。」<sup>13)</sup>とゲーテ自ら語つているのであるが、又ドイツ文学史上劃期的な革命をもたらすに至つた実に注目すべき出来事であつたことに、文学史家の均しく讃歎するところであり、而て実に我々をして、彼の憬慕する女性フリーデリケが永遠の野バラと咲くゼーゼンハイムえの道を追わしめる出来事である。

ライブチツヒ——フランクフルト時代のゲーテの失恋と失意と重患からの痛切な Leiden は、彼の、それまでの心を一応打碎き、虚しくし、清め、而て彼の所謂「救主が私をば——髪の毛を掴んで——捉えました。」<sup>14)</sup>と云う啓示の体験となつたのであるが、この体験を経てこそ彼は自然と、生命と、而てその Heil を、凡て神からの一連のものとして自覚するに至つたのであつた。抑々このような宗教的自覚は、召命感や、天才的自覚の前提たり得るものである。蓋し、此等は徳性や才能が、宗教的自覚に於いて、神性から受けるところのものだからである。我々は、この事実をハー

8) Haym, Rudolf : Herder, cerster Bd. 1954. S. 410.

9) Haym, Rudolf : Herder, erster Bd. 1954, S. 420.

10) Petry, Karl : Handbuch zur deutschen Literaturgeschichte Bd. II, S. 697.

11) Goethe : Aus meinem Leben, zweiter Teil zehntes Buch.

12) Goethe : Aus meinem Leben zweiter Teil zehntes Buch.

13) Goethe : Aus meinem Leben zweiter Teil zehntes Buch.

14) Goethe : Brief an Langer den 17 Januar 1796.

マンに、ハーマンの後輩ヘルデルに、而てヘルデルの後輩ゲーテに不思議にも均しく見ることが出来るのである。彼等は嘗て各所を異にして敬虔派の影響の下に、福音の啓示の、それぞれな体験をなし、宗教的自覚に立ち、同じ天才の道を、ハーマンは開拓者の如く、ヘルデルは其告知者として、而てゲーテは其実践の予感的な模索者として、相前後して進んでいたのである。それしても、一つの偶然がハーマンの居るケーニヒスベルグにヘルデルを学ばしめ、又他の偶然がそのヘルデルをゲーテの学ぶシュトラスブルグに臨ましめたと云うことは、ドイツ文学史上の奇蹟にも窺える。実際、至る所に存在する偶然をば、自己の応答に於いて人類のために永遠に生かし得た人は稀である。然し、これをゲーテに見る人は、又彼が「其消息は、骰を投げ、盤上の石を動かす遊戯にも似ている。確かに骰の目は決定的である。然し、同時に遊戯者の賢明な石の進め方も、勝敗の成行きに対して、重要な意義を持つている。」<sup>15)</sup>と語つたところに、運命の偶然が其人の態度によつて或程度生かさされ得るものであることを、教えているのに気づかなければならない。ゲーテが彼の人生に於いて、必要な時に必要な人に図らずも出会つた偶然に類なく恵まれた如くに見えるのは、一つには其偶然を生かす度虚なものが彼の内に働いていたからである。それは却つて、彼の宗教的自覚に於いて才能が天才たらんとする、内的且つ自然な努力なのである。シュトラスブルグに於いてゲーテが、図らずもヘルデルに出会つたと云う其偶然も亦このような内的努力によつて生かされたのである。

ゲーテは、ヘルデルとの初めての出会いをば、劇的な時と所に偶然が織出したものとして、書き初めているが、間もなく、その筆致には偶然を生かした彼のデモーニッシュなまでに異常な努力の思出が迸り出て来る。「私にとつて極めて重大な結果をもたらすことゝなつた最も特筆すべき出来事は、ヘルデルとの相識と、それに続いた親密な交際であつた。彼は、憂鬱な気分にあつたホルシュタイン・オイテーン公子に旅の御供をして、共にシュトラスブルグに来たのであつた。我々の仲間は、彼が到着したと聞くや、彼に近づき度いとの大きな希いを抱いた。而てその幸運は、全く思いがけなく偶然に、私に恵まれた。即ち私は、どう云う偉い人を訪ねるためであつたか覚えていないが、旅館ツーム・ガイストに行つていた。階段の下で私は丁度これから昇つて行こうとしていた牧師らしく思われる一人の人に会つた。……多少人の眼を惹く、然し、一体に上品な、好ましい風采は、予ねて聞いていた話で、私には、この人が有名な到来者であることに、疑いはなかつた。」<sup>16)</sup>とゲーテは書き出しているのである。

ビールショウスキー著「ゲーテ」41版の渡辺格司教授訳「ゲーテ評伝」によれば、「ゲーテは、ヘルデルを訪た時は、彼に就いて何の予備知識もなかつた。」<sup>17)</sup>と伝えられているが、1928年の新訂版原著「ゲーテ」に於いてビールショウスキーは「ゲーテは、彼を訪れた時は、この優れた到来者に就いて殆んど知つていたところもなかつた。」<sup>18)</sup>と語つている。然しながら、事實は一つであつて、両説は恐らく見方が表現の上の50歩100歩の相違に過ぎないであろう。成程、シュトラスブルグ時代の約1年後の1772年7月中葉ウエツツラルでウエルテルの悩みにあつたゲーテが、ヘルデルに宛てた手紙に「2週間以来大兄の「断章」<sup>19)</sup>を初めて読んで居ります。」<sup>20)</sup>と書いていることによれば、其以前のシュトラスブルグ時代はおろか、更に其以前のフランクフルト療養時代のゲーテは、恐らくヘルデルの他の著述をも実際に読んで居らなかつたらしい。従つてゲーテ自らも自

15) Eckermann, J.P.: Gespräch mit Goethe  
Freitag den 18. März 1831.

16) Goeth: Aus meinem Leben, zweite Teil  
zehntes Buch.

17) ビールショウスキー著: 渡辺格司訳: ゲーテ評伝上巻、昭和18年7月15日発行、126頁。

18) Bielschowsky, Albert: Goethe. erster Bd.  
1928 S. 115.

19) Herder, Johann Gottfried: Fragmente über die neuere deutsche Literatur 1760-67.

20) Goethe: Brief an Herder, Wetzlar mitte  
Juli 1772.

叙得の中で「ライプツヒに於いては、私は寧ろ狭隘な生活に親んでいたし、又フランクフルトの私の状態では、私のドイツ文学一般の知識は拡められることも出来なかつた。寧ろ、あの神祕的密教的化学の仕事が私を暗い領域の中に導いて、それで数年来広い文学界に起つた事は、私にとって大方未知のまゝであつた。」<sup>21)</sup>と語っているのである。フランクフルト療養時代のゲーテの宗教心が、クレッテンベルグ嬢や、医師メッツの影響の下に、化学に於いて神靈的なものを探求しようとするような神祕的な、密教的な幽暗の領域に入込んで了つていたので、彼が当時の文学界の趨勢や、其間の出来事などに就いて殆んど未知のまゝであつたことは真実らしいのである。然し、フランクフルト療養時代の1769年2月14日ライプツヒの恩師画家エーゼル教授宛の手紙に「彫石に就いての御知らせに対しましては、深く御礼申し上げます。それで事柄が明かになりました。レッシング！レッシング！若し彼がレッシングでありませんでしたら、一言致し度いところで御座います。彼に反対しては書き度いとは思いません。彼は一角の征服者で御座います。若し彼にしてヘルデルの「小さな林」<sup>22)</sup>にさしかゝりましたら、ひどく乱暴を働くことで御座いましょう。」<sup>23)</sup>と書いていることに窺えば、ゲーテは、エーゼルを通すかして、ヘルデルの「批評叢林」<sup>24)</sup>に就いて多少は聞き知つていた、と計倣されなければならないであろう。更に、シュトラスブルグに来てからの、ラウト姉妹の家に於ける食卓仲間による Gesellschaft der schönen Wissenschaft (又は Gesellschaft zur Ausbildung der deutschen Literatur) も、当時は未だ世に知られなかつた文芸愛好達の集りに過ぎなかつた程のものだけに、ゲーテにとっては、其等の人達によるヘルデルに就いての啓発も、左程ではなかつたであろうが、然しそれにしても、名声頓に揚りつゝあつたヘルデルの到来が話題になることはあり得たであらうし、従つて、ゲーテの、ヘルデルに就いての関心を、更めて強めたこともあり得たであらう。其故に、「近代文学の知識に就いて、私が如何に人後に落ちることを余儀なくされたかは、フランクフルトに於ける私の生活や、私の没頭していた研究から推測し得ることであるし、又シュトラスブルグ滞在中も其方面で裨益するところはなかつた。」<sup>24)</sup>と云いつゝも、然も我々の仲間は、彼が到着したと来くや、彼に近づき度いと大きな希いを抱いた。「……一体に上品な、好ましい風采は予ねて聞いていたところによつて、私はこの人が有名な到来者であることを疑わなかつた。而て私から話しかけたのであるが、私が彼を知っていることは直ぐ通じたのであつた。」<sup>25)</sup>とも、ゲーテは語り得たのである。何れにしても、食卓仲間による文芸愛好家達の集りを通しての多少の啓発は、あり得たことであつて、それが、宗教的自覚からの予感に模索しつゝあつたゲーテにとって、即ち鼓教授の所謂「この時はヘルデルが蛇蝎の如く嫌つたロココに耽溺した青年ではなく、病気のための帰省生活中にスザンナ・フォン・クレッテンベルグと云う女性によつて敬虔派の神祕的世界に導入られていたのだから、既に下準備が出来ていた」<sup>26)</sup>ゲーテにとっては、ヘルデルに出会う下準備に役立つことは確かなことである。

ヘルデルはゲーテよりも5才年上の、当時25才に過ぎなかつたが、若い時には、既にそれだけでも、大きな違いがあるのに、其経歴と識見に於いては、ゲーテのそれに較べて、雲泥の相違があつた。

ヘルデルは、モールンゲンの教会の貧しい、つゝましい役僧の家庭に生まれ、幼少から朝夕の敬虔な祈りと讚美歌の合唱の内に生まれ、教会の厳しい学校の生徒として又苛酷な副牧師の惨な書生

21) Goethe: Aus meinem Leben, zweiter Teil zehntes Buch.

22) Herder, Johann Gottfried: Kritische Wälder 1769.

23) Goethe: Brief an Oeser, Frankfurt den 24. Februar 1769.

24) Herder, Johan Gottfried: Kritische Wälder 1769.

25) Goethe: Aus meinem Leben, zweiter Teiler zehntes Buch.

26) 鼓常良: 独乙文学小史 53頁.

として刻苦勉励よく幼年よりヘブライ、ギリシヤ、ラテンの古典を修め、古郷の森と湖の辺りに想描く旧約聖書の世界へ、孤独なる自己を移入しては、其古代の敬虔な詩歌の世界に遊び、やがて恰も望み多き齡18の年、運命の偶然に恵まれてケーニヒスベルグ大学に笈を負い、神学と哲学を学び、北方の magus ハーマンの啓示切なる体験の言葉に尊かれて召命を悟り、リガの教会の副牧師の職につくや、「文学断章」と「批評叢林」を書いてレッシングを越え、若年既に世に高名を馳せ、後自ら求めては東海から北海への海路遙かなる船上に天涯孤独の自己を思索し、ナントに上陸、パリーに遊んでデーデロ、ダランベール、バルテルミーと談じ、ハムブルグにレッシングと交わり、当時正に一流人に伍する識見の人としてシュトラスブルグに臨んだのである。

このヘルデルがシュトラスブルグに来たのは、その3ヶ月程前からホルシュタイン・オイティーン公子の御供となつてゝあるが、公子の伝育官との折合もうまく行かず、窮屈な束縛もあり、又恰もブツケブルグ官廷説教師として期待されての招聘もあつて、其赴任と共に許婚カローネ・フラックスランド嬢との結婚をも考え併せて、9月18日頃このシュトラスブルグで御供の職を辞し、暫く滞在の上、従来久しく困難していた持病の涙管閉塞の手術を受けることにした。

ゲーテは、其間に於けるヘルデルとの出会の容子を、自叙伝に次のように書き進めている。「私は、どう云う知名の人であつたか覚えていないが、其人を訪ねて旅館ツーム・がイストに行つたのであつたが、私は階段の下で、恰もこれから昇つて行こうとしていた牧師らしく思われる一人の人に会つた。……私から話しかけたのだが、私が彼を知つてゐることは直ぐ彼に通じたのであつた。彼は私の名を訊ねたが、私の名は彼にとつて何の意味も有ち得ないものであつた。然し、私の卒直なところが彼の気に入つたらしく、彼は非常に快く返答した。それから二人で階段を昇つて行く時には、もう彼は熱心に話相手になつてくれた。……別れの際に、私は彼の宿を訪ねて行くことの許しを乞ひ、彼は実に親切にそれを承諾してくれた。私はこの恩典を屢々利用することを怠らなかつた。而て益々彼に惹きつけられて行つたのである。……彼は色々な問を發して私の事や、私の境遇に就いて知らうとした。而て彼の魅力は益々強く働いて来た。元来私は非常に心安い性質であつて、殊に彼に対しては(初めの間は)<sup>27)</sup>全く何等の秘密も持たなかつた。ところが間もなく、彼の性来の反撥的な臍博が打出し初めて、私を少なからず不快に陥れたのである。」<sup>28)</sup>

扱て、これまでのゲーテは、嘗てのライプツヒ——フランクフルト時代の失恋と失意と重患の Leiden による痛切な体験とを有ち、又それを契機としての宗教的自覚を有つに至つたとしても、それが直ちに彼の性格の全てを一変して了うものではなくて、裕福に育つた人の往々にしてあり勝ちな、社会的生活に於ける Leiden の痛烈な体験の乏しさは、猶お……少くともウエルテルの Leiden の体験を経て了うまで……ゲーテにも免れなかつた。裕福に甘える好青年としての彼には、思慮や洞察の甘さがあつたのである。此事は、宗教的自覚を別とすれば、それまでの経歴の全く対照的に反対なヘルデルがシュトラスブルグのゲーテを評して「ゲーテは本當に善い人間です。但し、多少軽卒で雀のようにおしやべりです。それで、私は繰返し繰返し彼を叱つて置きました。彼はシュトラスブルグで私の病室を訪ねて下れ、而て私も喜んで会つた唯一人の人間です。私も、己惚れではありませんが、彼に二・三の好い印象を与えたと信じています。それはやがて効果あるものとなる筈です。」<sup>29)</sup>と許婚フラックスランド嬢に書いてゐるところにも窺われるのである。

ヘルデルから此繰返された非難と、又与えられた此好い印象に就いての、ゲーテ自らの回想には、然し読む者をして、深い同情を感せしめずには措かないものがある。例えば、ゲーテが裕福な

27) 筆者註。

28) Goethe: Aus meinem Leben, zeiter Teil zehntes Buch.

29) Herder, Johan Gottfried: Brief an Herders Braut Caroline Flachsland.

若者らしく、罪のない嗜好で蒐集した印章のことを得意気に話せば、ヘルデルは意見を異にして、そのような深さのない趣味を擯斥嘲笑し、ゲーテをしてそれに嫌気を感じるに至らしめ、又絵画に興味を有つゲーテが、イタリアの諷刺画家ドミニコ・フェティの、聖書に取材した寓画に心酔する其ゲーテの未熟な芸術熱に対して軽蔑の詩を態々送つて来たこともあつた。ヘルデルが、本の貸与を乞う手紙にしても、本を読みもせずに飾っているゲーテを揶揄し、あまつさえ、宛名の Goethe を Kot の裔と侮辱して呼ぶ句であつたり、ヘルデルの意外に長びいた滞在と治療との失費に、好意溢れる同情の金作をなしたゲーテへの返債の手紙は、謝辞の代りに、ゲーテでなかつたら激怒して或は絶交もしかねまじき嘲弄の詩であつたりもした。言葉は、神が人間を創つた時に、直立歩行と均しく人間に与えられたもの、とのみ信じていたゲーテは、ヘルデルの有名な論文「言語の起源」<sup>30)</sup>の構想に対して、条件付きで賛成しても叱責され、はては無条件で賛成しても非難せられたのである。又ヘルデルの推賞して自ら読聞させる「ウエークフィールドの田舎牧師」<sup>31)</sup>に感動の余り陥る、ゲーテの洞察の不足に、ヘルデルは立腹して、ゲーテの愚鈍を責め、手術や繃滞替の苦痛にも平然忍耐するヘルデルの剛毅さに敬服するゲーテに、却つて折々爆発して、咬みついて来るようなヘルデルの癩癩に、ゲーテは幾度びか我慢しなければならなかつた。一体にゲーテの従来接触した年長者は、ゲーテを勞りながら教育してくれたのであつたが、ヘルデルは人に逆う氣質のためゲーテがどんなに振舞つても決して是認せず、そのためにゲーテは未だ嘗て経験もしなかつた程に、随分色々苦勞し辛抱しなければならなかつたのである。そのようなヘルデルに対して、ゲーテが、成程立腹はしなかつたものゝ、決して気持よくは思えなかつたことをも、我々は後年の老ゲーテの次のような述懐に窺い得る。「彼は貧困に生れて、幼少からの不偶に止むを得ず抱かせられた不満を、後年精神力によつて和げることが出来ず、其最盛期を自分にとつても、他人にとつても絶えず不快なものにし、人生の不公平に対して他人を嘲笑することを以つて讐を討つ癖があつた。」<sup>32)</sup>然しながら、シュトラスブルグに於いてヘルデルから受けねばならなかつた苦い経験は、ゲーテの飲まなければならなかつた Leidkelch だつたのである。

それにしても、嘗て既に幾度か己が見解を棄てた経験を有つたゲーテだけに、又シュトラスブルグの教会の聖餐式でも主の苦杯を思い飲んだゲーテだけに、或はシュトラスブルグ大聖堂の尖塔の方三尺の狭い露台に立つて眩惑から自己を守る鍛練をなしていたゲーテでもあつただけに、今や彼の精神の柔軟性と強靱性は、不当な非難には忍耐し、正当な苦言には従うことも出来たのである。ゲーテは自己の嗜好や心酔に対するヘルデルの嘲笑に反省し、而もヘルデルのそのような癩癩に拍車をかけるものとしての手術や手当や病床の苦痛に深い同情を以つて、立合い、用を弁じ、又朝夕となく、或は終日、病室に見舞い、看病に尽したのである。其間ヘルデルの変易い気分がゲーテに爆発することがあつても、其怒声の蔭に閃く深い知識や、博い見識に虔虚に聴き取ることをもゲーテは怠らなかつた。ヘルデルに書籍を貸し、医療費を苦勞金作した好意に対するヘルデルの、恰も忘恩的な揶揄嘲弄の如きにさえも、ゲーテは、人の驚くべき忍耐を以つて、反省すべきを反省し、役立つものを尊重するに努めたのである。「言語の起源」に関するヘルデルの論文の構想は、如何にして人間が自己の力によつて或言語に到達し得たかを述べんとするものであつて、それに対してゲーテが条件付きで賛成しても、無条件で賛成しても非難せられたのであるが、然しそれは興味もあり、得るところも多いので、ゲーテは当然これを受入れて己が糧となしたのである。殊に、これと思想的に深く関係する問題であるが「ヘブライ民族の靈感になつた旧約聖書の詩文をはじめ、凡そ

30) Herder, Johann Gottfried: Ursprung der Sprache 1772.

1766の独訳 Landpriester von Wakefield.

31) Goldsmith, Oliver: The Vicar of Wakefield.

32) Goethe: Aus meinem Leben, zweiter Teil zehntes Buch.

諸民族の詩は、一部有閑教養人の作つた財ではなつて、其等諸民族各々の真実に民族的な贈物であつた。」<sup>33)</sup>と云うヘルデルの論証には、当時既に宗教的自覚にあつて、既にロコ、を脱しつゝも、猶ほ踏出す道に撰び迷うゲーテは靈の底から揺り動かされ、感動せしめられて了つたのである。それは実に、ゲーテの詩魂が此時初めて生れたと云つても過言ではない程であらう。真にゲーテの詩風は、此時からこそ一変し初めたのである。ゲーテ自身も後年「私の従来考え、学び、所有していた一切のものを纏めて、より高いものに撃ぎ、而て拡大することの出来るような幸福な状態に、私は置かれた。」<sup>34)</sup>と自叙伝に感激を述べている。斯くの如く、ヘルデルの問いにも、答えにも、又其他の形の話しにも、何時も重要なものが含まれていたもので、ゲーテは日々、否、時々刻々新たな展望を急激に与えられたのである。其展望に於いて、ヘルデルが推賞し、誦聞かして下れた「ウエークフィールドの田舎牧師」の田園詩的な浄福の物語には、純情のゲーテは感激の余り——其話しの緩に現れる化装の人物の本体に気付かぬ鈍感をヘルデルから強かに叱責せられたが——忽ち、彼自ら化装の人となつて、「ウエークフィールドの田舎牧師」にも似たゼーゼンハイルの牧師の家に、馬を驅ることにもなつたのである。

かくてシュトラズブルグに於けるゲーテにヘルデルの与えたと云う「幾つかの好い印象」は、ゼーゼンハイムの歎びとなり、はた悲しみとなり、又野バラの歌に宿す限りない慚悔となつて、彼をばより高いものに繋ぐ実践の道標となつたのである。其故にこそ1771年の秋立ち初める頃、彼の棄てたフリーデリケに対する後悔の念が彼を放とうとしなかつた最中に、彼はヘルデルに宛て、恰もヘルデルを精進の頼りにするが如くに、次のように書いている。「ヘルデル様、ヘルデル様、あなたは、私にとつて現在あるがまゝに、変らないで下さい。私があなたの遊星として定められているなら、私はそうなつて居みましょう。喜んで、忠実にそうなつて居みましょう。地球の親しい月となつて。然し、あなたは——これを——本当にお感じ下さるでしょうか。私は、土星の周りを回る五つの中の第一のものよりも、寧ろ、あなたと共に太陽の周りを回る七つのもゝ最後のもの、最小のものである水星であり度いと思うのです。左様なら、敬愛する人よ、私はあなたを離しません。私はあなたを離しません！ヤーコブは主の天使と格闘致しました。私も、そのために跋へても！」<sup>35)</sup>

ゲーテとヘルデルとの、前述したような接触の容子に就いて、ビールショウスキーは其著「ゲーテ」に於いて「自然は、愛すべきゲーテに配するに、烈しい気性のヘルデルを以つてした。」<sup>36)</sup>と語り、ハイネマンは、「此両人の性格と経歴ほど著しい対照を世界もあまり見たことがない。」<sup>37)</sup>として、此両人の互に引きつける力をば「磁力の神祕に似た自然」<sup>38)</sup>と比喻している。然しながら、ハイネマンの此比喻は、猶お未だ真相を衝くものではない。蓋し、両人の性格と経歴の相違そのものに、磁力の陰陽の如くに、相引く由因のものが存したのではなくて、寧ろ、ヘルデルの反撥的な激しい性格は、柔軟な性格のゲーテにとつてさえも「少からず不快な思いをさせた」<sup>39)</sup>由因のものでこそあつたのであり、又裕福の故のゲーテの甘さは、却つてヘルデルの嫌悪と非難の対象でこそあつたのである。それにも懸らず、ゲーテは其不快を耐忍び、ヘルデルは其嫌悪と非難とを剝出しにしても、猶且つ、ゲーテはヘルデルに吸着き、ヘルデルはゲーテを引着けた由因のものは、確に

33) Goethe : Aus meinem Leben, zweiter Teil zehntes Buch.

34) Goethe : Aus meinem Leben, zweiter Teil zehntes Buch.

35) Goethe : Brief an Herder, Sommer oder Herbst 1771.

36) Bielshowsky Albert : Goethe, erster Bd. 1928 S. 116.

37) Heinemann, Karl : Goethe, vierte verbesserte Auflage, erster Bd. 1916 S. 89.

38) Heinemann, Karl : Goethe, vierte verbesserte Auflage, erster Band 1916 S. 89.

39) Goethe : Aus meinem Leben, zweiter Teil zehntes Buch.

他になければならない。磁力の陰陽が互に牽引するには、磁力の働く互の物質が、先づ鉄屑として共通の要素を有たなければならぬ。恰もそのように、ゲーテとヘルデルが互に牽引するためには、両人は先づ互に共通な何等かの要素を有たなければならぬであろう。ヴォルフは、此關係を暗示するかのよう、「ゲーテは、彼の精神の中に（ヘルデルの強調する）<sup>40)</sup> 民謡の kongenial な理解と発展に寄与するような要素を有つていた。」<sup>41)</sup> と語っていることは、傾聴に値する洞察であろう。それは民謡を認識する精神の深所に kongenial な共鳴を必然的ならしむる共通のモチーフを、ヘルデルとゲーテが相共に有つていたことを意味しているのである。然し、ヘルデルは其モチーフに基く認識の道を既に持ち、ゲーテはそのモチーフを持ちつゝも認識の道を持たなかつた、と云う所に両人のプラスとマイナスの由因があつたのである。而て彼等の共通のモチーフとは、実に彼等に共通の宗教的自覚だつたのである。鼓教授が「ゲーテは、此時は、ヘルデルが蛇蝎の如く嫌つたロココに耽溺した青年ではなくて、病気のための帰省生活中に、スザンナ・フォン・クレツテンベルグと云う女性によつて、ピエチスムスの神祕的生活に導き入れられたから、既に下準備が出来ていた。」と語っていることも、ゲーテの宗教的自覚による予感の模索が、ヘルデルの同じ宗教的自覚に基く、自然な認識の道に出会つて、やがて民謡の認識にも共鳴し得るに至るべき下準備が出来ていたことを意味するものである。シュトラスブルグ時代の直後、自己を感じることヤコブの如きゲーテが、ヘルデルを恰も天使の如くに感じてヘルデルを捉えて格闘し、「たとえ蹴しても離しません。」と語つたのも、両者共通のモチーフとしての宗教的自覚に立ちつつ心貧しいゲーテに、ヘルデルから祝福を期待して止まざる所があつたからである。此処にこそ我々は、ゲーテのマイナスとヘルデルのプラスに相応したものを観取しなければならないのである。

人は、高貴である程、一層デーモンに影響され易い。従つて、己が指導的意志が岐路に陥らぬように絶えず用心しなければならぬ。\*

それにしても、ゲーテのヘルデルに接触するや、自己をヤコブの如く感じ、ヘルデルを天使の如く感じて、捉え而て離すまじとするゲーテの態度には、何か或異常なものが憑き働いているのを人は感ずるであろう。木村教授はこれに就いて、「青年ゲーテのヘルデルに対する態度には——一層深いところから發するものが含まれていた。それは、気憶（自叙伝）<sup>42)</sup>の中で読みとられるような理智的な打算ではなくて、本能的な深さを持つている必然的な決定性を示すものである。茲にもゲーテのデーモンがヘルデルの持つものを嗅ぎわけ、それに対して抑制することの出来ない愛著から、蹴られても、踏躪られても離れることの出来ない執拗さを以つて、ヘルデルにまつわりつuitと云う感がある。」<sup>42)</sup>と語っている。抑々、ゲーテの生涯に於いて、必要な時に必要な人が登場した人物の中に、ヘルデルやシルレルも数えられるのであるが、シルレルとゲーテとの出会いは、シルレルが恰も哲学的思索に倦み出し、又ゲーテがイタリーから歸つて、自ら選んだ孤独に製作への刺戟を欠き、自己の詩人的才能に絶望を感じ、其窮状から拔出し難きに悩みつゝあつた時、恰もイエーナ自然科学協会に於いての全く偶然の出来事だつたのである。然しなら、若し此兩人の出会いがなかつたならば、ゲーテの優れた作品の多くは彼の内に埋れたまゝに終つたであろうし、又シルレルの場合も同様で、例えば、ウィルヘルム・テルの如きも現れ得なかつたであろう。ゲーテは此頃

40) 筆者註。

41) Wolf, : der junge Goethe, dritte Periode, Anfang April bis Ende August 1771.

42) 筆者註。

\*) Eckermann, J.P. Gespräch mit Goethe :

Dienstag den 24. März 1829.

43) 筆者註。



のシルレルとの接触に顧みて、「私とシルレルとの相識にはデモーニツシュなものが働いていた。」<sup>44)</sup>と語っている。彼とヘルデルとの接触にも、デモーニツシュなものが働いていたとは、言つて居らないが、ゲーテが自叙伝やエツケルマンに、デモーニツシュなもの、又はデーモンに就いて語つたところに読み取れば、木村教授の推察を許すようなものがあつて、殊に、ヘルデルに対する彼の異常にも見える執着に顧みる時、そのような推察は寧ろ当然のこのように思われる。

ゲーテの自叙伝<sup>45)</sup>並びに、「エツケルマンとの対話」によれば、ゲーテの所謂「デモーニツシュなもの」とは、自然の内に、従つて、人間の内にも、働いて、何ものにも制約されない原力としての、暗い力である。それは、人の状況次第で其人の善き靈にも、亦悪しき靈にも働きかけて、其人をして善をも、亦悪をも行わしめ、或は其人の高揚をも、没落をもなさしめるような、恐るべき力なのである。このようなデーモンの働きをば、初めてゲツツ・フォン・ベルリツヒンゲンに表徴化して、突如、詩人的名声を世に馳せた青年ゲーテは、既にシュトラスブルグ時代に、デモーニツシュなものゝ働きを身近に経験もして、其呪縛からの逃避の術に腐心して居つたらしい。彼は此事を自叙伝の終り近くに述べるに、恰も確實な出来事として、第三人称のこの如くに客観化して書き出しているのである。「人はこの自叙伝的な話しの進行の中で、いかに小児が、少年が、青年が諸々の道を辿つて、超感覺的なものえ近づこうと努めたかを、詳しく知ることが出来た筈である。即ち、初めは自然宗教に傾き、次には進んで天啓宗教(既成宗教)<sup>46)</sup>に凝り、それから、自己の内に籠つて自らの力を試み、而て最後には悦んで並辺的な宗教<sup>47)</sup>に帰依したのである。彼は、これらの領域の中間に行きつもとどりつ彷徨い、摸索し、右顧左眄していた時、これら全ての領域の何れにも属さないような、多くの事柄に遭遇したのであるが、彼は次第に、法外な事や、不可解な事に就いての考えからは、寧ろ避けるに如くはないと悟れたように思つた。彼は、自然の裡に、生あるものにも、生なきものにも、又魂あるものにも、魂なきものにも、矛盾と云う言葉によつてのみ云現わされ、従つて、如何なる概念を以つてしても、まして一言を以つてしては、把握され得ないような或ものを発見したように思つた。それは、神的ではなかつた、蓋し、それは非理性的のようであつたから。人間的ではなかつた、悟性を有つていながつたから。魔的ではなかつた、有益であつたから。天使的ではなかつた、屢々他の不幸を喜ぶ風があつたから。それは偶然に似ていた、何等の連絡も示さなかつたから。我々を制限する一切のものも、それにとつては突破し得るようであつた。それは我々の存在の必然的な要素を存分に処理するかのようであつた。それは時間を短縮し、又空間を拡大した。それは不可能事だけに執心して可能事を無視し等閑に附するかのようであつた。」<sup>48)</sup>「他の一切の事物の間に介入して、それらを離合集散させるが如き此存在をば、私は……デモーニツシュと称した。私は、この恐るべきものから自己を救はんためには、私の流儀として或形象の蔭に逃れることに努めた。」<sup>49)</sup>と述べているところによれば、ライブツツヒ時代の精神的間隙やシュトラスブルグに於いてピエチスムスの教会の同信の狭量から逃れて、心彷徨い、摸索し、右顧左眄しつゝあつた彼の精神的間隙に、デモーニツシコなものゝ訪れを身近に経験するようなこともあつたらしいのである。<sup>50)</sup>而てそのようなものゝ訪れから、彼自身が救われるためには、彼は、やがて

43) 木村謹治：若きゲーテ研究。142頁。

44) Eckermann, J.P. : Gespräch mit Goethe, Dienstag den 24. März 1829.

45) Goethe : Aus meinem Leben vierter Teil zwanzigstes Buch.

46) 筆者註。

47) ゲーテはシュトラスブルグ時代に宗派的、教会的キリスト教から脱して、超教派の一般的なキリスト

教的信仰に入りつゝあつた。

48) Goethe : Aus meinem Leben, vierter Teil, zwanzigstes Buch.

49) Goethe : Aus meinem Leben, vierter Teil, zwanzigstes Buch.

50) Goethe : Aus meinem Leben, vierter Teil, zwanzigstes Buch.

或形象の蔭に心を避けるに至つたのである。蓋し、其場合デモニツシュなものは、彼の抱く形象の前に、恐らく、柔げられ、或は却つて善き靈に働きかける力となるからであつたらう。

それにしても、ゲーテが逃れたと云う「或形象」とは恐らく「宗教的な心的形象」であつたのではあるまいか。蓋し、ゲーテは、「神を措いて何者も神に抗い得ず。」と云うことを当時自己に於いて知りつつあつたからである。<sup>51)</sup>

---

51) Goethe: Aus meinem Leben, vierter Teil, zwanzigstes Buch.